「緑の栄冠」の成り立ち

「緑の栄冠」は、1967年（昭和42年）８月、女子学生の有志によって、誕生した。
66年（昭和41年）７月、女子学生部が誕生。翌年、次代を築きゆく女性として、師弟共戦の決意の歌をつくろうと、作成委員会ができた。しかし、皆が納得できる歌詞はなかなか完成しなかった。
67年（昭和42年）５月、学生部の会合において、第三代会長池田大作先生は「御義口伝」の「起は是れ法性の起滅は是れ法性の滅（御書566ページ）」の御文を通し、自然界の法則を例に、輝く若葉の季節である学生部の時代を、悔いなく送るよう指導した。「皆さんは今、人生の新緑の季節」この言葉が女子学生部員の心に響き、愛唱歌の魂が決まった。小さな若木が風雪を耐えぬき、やがて大樹に成長するように、
池田先生の「あふれる光」のような薫陶を受け止めて、「理想の大樹」と育ちゆこうとの決意が、歌詞に託された。また、明るく爽やかなメロディーは気軽に口ずさめるようにと、有志により、苦心して作曲された。
当時、日本各地の大学では学生運動による偏狭なイデオロギーの嵐が吹き荒れていた。そんな激動の時代に「緑の栄冠」の清々しさは新鮮に響いた。
若さにまかせて突き進む学生運動の荒々しさに対して、「緑の栄冠」には、“師弟に生きる喜び”“自身の成長への誓い”“社会変革への清々しい気概”がこめられている。
「緑の栄冠」の“緑の”には、“生命の”“妙法の”という意味があり、“生命の栄冠”“妙法の栄冠”“人間としての勝利”という思いが込められている。
１番は、清新の息吹に燃えて、溢れんばかりの師匠の慈愛を受けて妙法の栄冠”“緑の栄冠”を目指して成長していこうとの決意があらわされている。
２番は、人生の過程には、雨も嵐もある。しかし、大地を揺るがすような激しい嵐があってこそ、その後に“希望の虹”が大きくかかる。苦難に挑戦し、希望をもって乗り越えていく強い生き方をあらわしている。
３番は、木々の緑が、紅葉し、やがて落葉していくような、時とともに移ろいやすい生き方では無く、“高くそびゆる常緑樹”のように、普遍の哲学をもち、人間として崇高な正しい生き方を目指す、との思いがこめられている。
４番は、大地に“根を深く”張り、冬の厳しさに耐え抜いてこそ、立派な年輪を刻めるように、「教学」を深く求めて、心肝にそめ、求道心を持って誇らかに年輪を刻みながら、“理想の大樹”に成長していく誓いが込められている。
池田先生が、「緑の栄冠」を初めて聞いたのは、完成の翌年、68年（昭和43年）５月26日、東京・八王子市の創価大学建設予定地で行われた、青年部の合同野外研修の時だった。豊かな自然のなか、決意の集いとなったこの日、女子学生の代表が合唱したのだ。池田先生は、女子学生が歌う「緑の栄冠」をうなずきながら、じっと聴き入り「いい歌だね。感銘を深くしました」と語りかけ、「どうだろう。今月の本部幹部会で全国の人たちに聞かせてあげたら」と提案。
女子学生部の愛唱歌として誕生した「緑の栄冠」は、後に池田先生の提案によって、広く女子部全体でも歌われるようになった。